

全人類のなかで

国際日本文化研究センター准教授

磯田 道史



全人類のなかで、日本人は何パーセントを占めてきたか。先日、それを考えてみた。この場合の日本人とは、日本列島に住む人というほどの意味である。つまり、歴史学者らしく、日本人口の長期的趨勢を千年単位で考えてみたのである。

その結果は、驚くべきものであった。日本人口の長期動向は、鬼頭宏（現、静岡県立大学学長）の推計が知られている。西暦230年＝卑弥呼時代の「世界人口は2億人」（Colin McEvedy and Richard Jones 1978）である。当時は中国に0.6億人、インドに0.75億人、全欧州に0.35億人が分布していた。卑弥呼時代の日本人口の世界シェアは0.3%にすぎない。卑弥呼は人口比で100倍、経済力で数百倍の中国に対していたのである。

同じように、日本人口の世界シェアを調べてみると、次のようになった。

	世界人口	日本人口	世界シェア	備考
230年	2億	60万	0.3%	卑弥呼の弥生時代
1700年	6億	3000万	5%	徳川綱吉の元禄時代
2000年	60億	1億2千万	2%	現在実績
2100年	110億	8300万	0.75%	国連予測

つまり、日本人口の世界シェアが最高になったのは、犬公方とよばれた徳川綱吉や赤穂浪士の元禄時代であって、この時、世界の20人に1人（5%）が日本人であった。卑弥呼の時代は330人に1人しか日本人ではなかったのだから、よく増えたものである。ところが、堀屋太一氏が元禄時代を「峠の時代」とよんだ通り、この頃から日本人口の世界シェアは低下し始める。現在は2%だが、22世紀の門口にあたる西暦2100年には1%を切って、古墳時代の日本ほどにそのシェアを低下させると、予測されている。

おそらく将来、江戸時代は日本の栄えた時期として、憧憬の念をもって回顧されるであろう。江戸時代の国際的実力はたいしたものである。アンガス・マディソンは、世界中の過去の国内総生産（GDP）推計で知られるが、江戸時代後期（1820年）の先進主要国のGDPを推計している。それによれば、当時のアメリカのGDPを1とすると、日本のGDPはアメリカより経済大国で1.75倍、オランダは0.3倍、イギリスは2.8倍である。さすがに1850年になると、アメリカのGDPは日本の2倍近くに達するが、幕末日本は経済的にアメリカに対抗する力が十分にあり、武器はいくらも買えたから、実は、黒船ペリー艦隊は恐れるに足らなかった。ちなみに、昭和になって、日本がアメリカに戦争を仕掛けたときの、日米のGDP差は1対4・5（1940年のGDP比較）。工業力ではもっと差が大きかったから、これは無謀である。

世界銀行は、2050年、中国・米国のGDPは日本の約8倍、インド・EUは約5倍になると予測している。さてこの島国の人口ピークは1700年、軍事ピークは日露～満州事変、経済ピークは購買力平価で中国よりGDPが大きかった1970～2000年頃でもう過ぎた。そして、この国はもはや大国と軍事対決できる経済的実力はない。経済の世界シェア＝量が低下するならば、質を高めるしかなかろう。小国化しても良質の「価値」を保つ国のあり方を研究したいと思っている。